

中村俊定文庫
文庫 18
307



起

起

集

半紙本一冊
序四丁

本文三十九丁 終半面ナシ

題字ナシ (中央にハリアトあり)

表紙不スミ色

名目又季比下

中林里海風齋氏藏

原本後分
昭和十一年七月二日

いその巻詞

草といふ草おかし葉蓮に似て

雨露を兼するたもかは露を玉と

あさむくと呵ら水た水とむよくこ

降しあむんよりゆあしむあし御鉄

足ふといれみた、かおの軍書乳母が午に

見しよなつあしきぬかつき又昔しく月の

夕へ上臈の手をも添給ふかとにゆく

風流ものと

鶴 鶴や日の入かたに尾を振りて
山 呼

和らかに焚けよ今としの手作麦
如 舟

田植と共に旅の朝起
芭 蕉

是うをほしめと一へ順路敷あり
はゆかりをしたふ

信友門人け道に足を止る事あまたたひ或年

今の義助が必死すかた又て

鍛次が火七ことさうにこそ笠の霜
嵐 雪

あき足袋をばた極光
如 舟

照月に木の五葉をかそへ辰
桃 隣

中村里秋原稿用紙

また

大井川に舟あるとし花の旅
嵐 雪

富士を目尻に嵐雪の春
如 雪

維子の声け人と藪かす棒出して
白 雪

言なうぶりの風雅はかましましき世にも人くの肩にと

む将宗長法師が生産の地の無下よあらんも不意存しと

如舟か橋の内には堂をむすむ誰か宗長庵とよはふ

素堂が宗長庵の記(塚本氏)あり(重の筆)

は春日光一品法親王御
とめさせられ此地に宗長

かいはり桃青の短冊ありとや御覽せられ人の御けし

落了日のニちらに月の身にしる
 駕籠と床りの棒に初昔
 手籠に山と籠より温泉を涌し
 笑ひ交りの智に談話
 何所やうで持て出さうなたはこ倉
 浦里なかに君か代を小は
 皇髪と津島の市師と袖を振
 蝶の時雨と濡ぬこは髪を弄し
 貫けるし井戸も樓の名に立て
 建久時分からの所人

竹 曙
 古 江
 菊 兎
 琴 席
 桂 序
 右 嶺
 一 志
 左 嶺
 馬 栢

中村里秋原稿用紙

直雲をふけと霞にも能く取った
 公事は流るる君の夕月
 提重しはわろは置の花はあり
 久三カ智恵と蝶の一飛
 しめつ有背戸をそり解~~捨~~
 もの思はせに骨のあら雨
 ほとさす五位と跡のさきやあし行
 堤に宿ふて隅田庵崎
 筒油に番~~番~~ひさし唐繪めき
 いかかりるともしれぬ特~~特~~を

鬼 助
 魚 等
 五 調
 曾 六
 百 鳥
 雪 支
 鯉 遊
 藝 雨
 茶 斛
 花 汐

あつたのり
さうじ
あつたのり

あつたのり
あつたのり
あつたのり

あつたのり
あつたのり

し	の	山	け	向	の	序	廣	を	吟	し	て	又	見	の	嶽	の	媒	と	可	極	さ	く	
訪	ひ	来	る	も	の	あ	か	水	庭	に	道	の	一	の	清	水	を	か	た	り	巨	壺	に
入	り	斗	の	草	跡	を	も	ふ	く	流	石	古	菓	の	友	と	り	い	つ	み	し	ま	ソ
の	気	先	も	し	た	い	に	衰	ち	け	て	あ	年	の	夏	深	川	の	片	也	上	膝	
佐	師	を	さ	ら	け	小	箱	招	了	里	に	朝	席	を	ゆ	す	ら	る	只	雲	水	一	筋
せ	鏡	り	ハ	と	せ	か	ほ	と	無	所	住	の	境	界	を	得	て	養	飼	す	る	宿	に
頭	を	擧	げ	山	月	を	望	か	る	べ	を	た	け	て	故	郷	を	あ	ら	ふ	べ	と	
紀	行																						

中村里秋原稿用紙

河を平色

島田
植杉山
花林直島

孤帆亭

8

上野	ろし	ろにし	おこの	独歩	思ひ	立し	し	そ	こ	に	は	雨	風	あ								
は	た	、	し	く	か	し	こ	に	は	脳	痛	に	枕	あ	り	す	殊	も	と	漸	半	色
了	さ	小	は	は	鳴	田	の	歌	は	蕉	翁	嵐	雪	の	古	き	松	の	か	り	残	て
風	雅	子	遊	ふ	人	し	夢	し	中	に	と	杉	山	何	れ	し	と	武	江	に	と	折
く	出	て	心	あ	ぬ	男	あ	り	り	名	は	直	島	と	い	、	林	は	花			
と	よ	ふ	の	水	か	と	と	に	杖	を	休	て										
と	い	、	て	日	敷	る	る	ま	、	爰	り	し	こ	の	吟	子	に	振	る	し	の	句
三	斛	の	外	を	菜	飯	や	花	の	宿												

中村里秋原稿用紙

其種子

仙李子

快林寺
閑眠庵
志中法師

例	の	大	井	川	水	ま	ず	り	左	日	の	た	つ	く	ほ	過	る	芝	蔭	を	祝	す		
瀨	枕	に	と	ま	ら	ぬ	春	や	大	井	川													
春	の	名	跡	お	し	あ	へ	さ	夜	其	桂	子	か	四	邊	半	に	遊	ぶ	表	み	たり		
白	壁	を	雪	に	も	お	し	め	炉	の	名	残												
遠	江	の	新	貝	貝	と	い	ふ	所	に	仙	李	子	と	て	古	き	吟	友	存	正	し	は	耳
順	の	志	を	健	に	あ	か	へ	て	そ	う	契	詠	集	ら	る	、	に						
快	林	寺	の	木	間	か	く	水	に	う	さ	世	近	あ	り	草	堂	あり	閑	眠	庵			
と	い	ふ	先	の	主	僧	志	志	牛	禪	師	の	老	を	養	ひ	給	ふ	を	訪	ふ			

腸をさうしに月のかはづかな

かえし

春風を吹起さし葦草哉

閑眠庵

花さくら戸の白ふ木かく小

雪中

大耳の北とより朝露の目覚し草とて所の青やかなる筒

に花のかずくさ、添へおくらるゝに

しう孝子や人のこゝろの透通り

駈路馬士川越の行かひしけく旅情を養へにはと例の連

中のはかろひにて快柿禅居に臥陀をうつす主僧も古史

の風骨をおもしろかりて雪門にあか子ころしと安虎の

中村里秋原稿用紙

はしめちうけやは

籠居て碓ふまへ夏の月

青田にやとけ臥陀の雲水

卯月はしめ車武の改良といふ俳士神踏山もふてすとて

夏の瓢樹林に一夜と、まゝ栲師も根のゆて故郷のたよ

りなと聞ぬ

餓別

松政もよしや笠着て踊かな

留別

振やけの角の間ちかしかたつあり

改良

卯月卯
車武の
改良
瓢樹林

日休舎
白雲寺

秋

卯月十九

是師ハハ
尚書ノ
10

同しく七日日休舎にて會あり日の明の暮葉卯花の雪雪
とよし倒鴨のニミ子につさを白雲寺に登る

山寺や五色にあまの花御堂

山寺の躰は寒し佛生會

流佛やけふは覽の常なりず

秋光といへる人は和歌の浦懐に心をさくらととあり

今又嵐叟の俳風をしたふ我門に入

言と、さす麦の鳴日ははいかい師

十二日は古翁の年年とて五歌仙ありおなしく十三日

は是師の忌日なるを幸に予此禪林にありとあるいすむ

かし嵐叟當歌に旅寝の頃

大井川に舟ありし花の旅

右は塚本如舟亭にての吟也此句中の文字を題に取り

て八章の午向有脇のみしらす

如

午僧の飯盛とし花卯木

た、く水難の篇も雲板

船

蓮の葉のときれや月の涙し船

味を薰る風の入相

魚鳥

兎流

百川

九思の
土

中村里秋原稿用紙

花

十月の雲を卯月の帰りはな

大耳

空に魂よふ山ほと、ます

雲中

有

咲午向散午向あ、けしの花

魚鳥

序橘の香の名は今

大耳

旅

空を飛ぶ旅の一字やほと、ます

百川

新も若葉の笠まさあけ

児流

大耳の花母を七用の法返いとなまるくと聞て旅館に

とたぬめ手向を贈り

何之いら四いらの花は折添へん

今宵九鬼家のた守氏所は止宿し給ふ右竹庵のぬしと供

奉して夏まやとるさ小よ去年の夏武江にありて切戸か

ら涼しさつなり便あらはと丹前の首途を見送り

け此島にたかひの目黒みを笑ふ

落合ふて切戸を繋ぐ清水引

なを素履子が詩あり此夜のあるしせし甚柱ひたすらに

えふて予が句と袋戸を疎す李子が筆力をあらし

この

九鬼家の工
古竹庵

李陰子

推手 (Suzushu)

裏にハを携来て明頭暗頭の曲を尽すかの携子を削て旧
 里をしのふのの歌^るハにはあらず旅愁を慰るあうけり其
 声梅にうくおすの調卯て空に雲雀のいとほのかなるを
 推手の水雞田^つらにたき五路と^かか^つへ^つ了^つ音^の時^鳥
 雲をしめく^つて^て恋幕はしめやか^らは^ら馬^の名^や三
 らん^の曲^のけ^やめ^えは^は夜^きの^秋を^つく^るこ[、]あ^して
 醒小は無常迅速をしめし眠小は四時の花鳥を聞てしは
 短^の夜^の更^のを^しら^る
 寺を^第よ^し尺^八の^友と^り
 卯丹^未の^八口^今昔^は汽^氷の^浮林^はあ^のく^つと^ひま^り

中村里秋原稿用紙

大町馬車
飯の
飯

て帰路の名残をおいあまして言傳は蕉の古風をした
 乙或夜は^可窓^の灯^を剪^つて^本鴉^舟の^一句^をわ^かは^無手^の
 一^ト方^もけ^けぬ^のと^とつ^あか^てる^別の
 こ[、]ろ^を申^ぬ
 み^しか^夜に^風の^席の^別か^な
 行水の千^里の^際世^の夏^の月
 連中^餞別^主傳^の文^をみ^らし^つ
 舟を^人く^送る^河鳥^をあ^らば^朽山^の橋^{より}帰^る大^耳魚^鳥
 七^あくり^止す^浪戸^のあ^らじ^染飯^の名^のお^かし^り木^は夏^に

石峰 巖林

腰のりて盃をあくる又青山人の子と云ふのりこの垣けに白き花の盛なるを
暮七は白晒のりさきよく、宜島は影ほしの哀小なるさま
を遠ふ大耳老人は予とともしにしけらく祇祀の心あふは
日暎暎のあやしみを添ふるふ水水中の離別わかれ
山梔子やゆきのいはす敷あゆみ
巖林 一帯の草以下三十三行ヨ 又しん
大耳老人とよに藤枝の驛入て右岸あしとたやとる
は家布帯の予を帯とすこもしとあう衣張あゆしとくの
行あかしけし我あう心あく是へこ
紫陽花も浅黄の中に若二人

中村里秋原稿用紙

甜水亭

五月廿しめ門入の人くよ對して
文も有のし五尺の菖蒲より
若林の百になごまで扱ゆらん
大耳
甜水亭

ちあきあきつは蓮蓮寺とて山深ひの力寺有蓮の浮葉葉包
んと甜水水ゆし足よまてとちたふ俄の催し催お小は洒少携
たよりみ木枕は住寺のもてちしと定ま定に外直にし
こ臺らうといふ遊むをまし寺は高標標を造蓮池をのそ
お山近あしすお松籠ちりかゆ植声遠よりす農夫の行か

いも標を存くさむる正く馬車に望すか正

寺の寺蓮

船かとも寺を蓮にせのわす小

寺の鴉

未長朝 暮鴉の尾羽の露や蓮の玉

珙 水

寺の田唄蓮

池に落蓮の声あつ田植吹

珙 倉

寺の鴉

はろり葉のなを静なりかいつふり

珙 珙

寺の酒蓮

蓮葉をすし蓋のちげ流し

和 珙

寺の枕蓮

木枕にほとよき蓮の浮葉引

珙 珙 風

寺の燕蓮

燕や蓮の浮葉をすりはろい

大 耳

てんてん 燕の峰子方と鴉の吟あつしつ明水は五月四日

宿中のころへ赴く右岸野水大耳送る西子は湖か瀬す

降し又年老人水とありへる所迄は送るて夏に名跡を

おしむすれよ君反五十字はるくゆ水は三十字飾りな

ら心の水の行通へはやけ三十日飾りひとつ蒲団をかぶ

夏を忘る

調柳

閑の戸の母明き夜や旅枕

調柳

おくれくはつほとりきす

調柳

いつめとしにや調柳老く予か申井の旅宿また採てや

杖よしらすし雪の宿と一章をくり附て過りしか漸

ふとせはゆりの流行にしけお五調亭に其時の朝寝を

笑ふ

杖

恙非の宿をかたにや雪の杖

十島の里橋子

十島の里橋子は白羽のるあつて東武の趣るくを知らし

ほくくあく木をみ長く諷漢の交をなして

中村里秋原稿用紙

文臺の又日思みの二欠せん

雪文亭

風鈴の面巾や三徳の青あらし(雪の亭のまじり)

暖山子の別花の遊ふ床の草神の馬像をうらし細

せ庭の松さくう松の青葉をみけふのあらし細

めきり

蓮の香を毒のつあおや南を自在(雪の亭)

宇明菊露の西子訪ふ暮の及て後枝の右岸子来うれ

さるすあつて武陵の趣のよしをを同門のた水あつにお

もてあはせしかたのちり

青路し恥ず心の友ちと

右 峯

同行の人よりさかき道なきのふあふんこまりまき水
は行路の五月雨帰路の水無月いつ水としのきかた折
ありなやなあり旅の息をとり揮ふ此眼の別を正
みく

杖

行帰る杖や千里の正し

笠

帰る日の黒みえ前水し笠の内

瓜 養

汗拭

中村里秋原稿用紙

夢越る右の千綱や汗ぬくひ

雪 支

蝇拂

浦風を餓よりさ蝇はるひ

五調毒

ま 一

唐幸子

朝餉く進めえ青し唐あし

夢 雨

香幕散

道くの清水にちるせかろしや散

五 調

為別

振切つくおきつる雲見

炭枝

右 崎

は浦星の遊ひも名殊おしむへさころ紙に咽痛出え飲食

ほと、きす夢に神のあり合せ

左吾の夢

夜よ入て仙遊あり夢聖神午の風枝老人ど、より外連中

入来ツ歌仙共行吾の夢スガ恒まは道びてニワ

対詠吾の夢

この種とやういふ命ありて素琴亭に

富合し然ふ雪史と六とせの離情を

詠了

夏はなを紐解安し居士夜同士

風としく他の高涼す

府中

雪 風 枝

中村里秋原稿用紙

望に降了富士久てニさ小雪の王

伊豆達

屋 我

別改路まねく麻の虫はを小

夏草を介て山路の旅寝かな

這 来

武苑に恥了汗の調布

中

頭陀かけて夏に長めれ百日紅

吟

中 落

袷?に遊ふ宿の浦風

中

祝儀まこにあまくあさくお

唯 揚

我屋敷にけし三番使

中

白雨のやまや草の中をみ

菊 香

交わすふ夏菊の水

(あまのつゆにまじりて)

中

河原に遊ば帰る遠来の心とを訪ふアサヒ明水は素琴子子主主唯唯揚揚

子にワナをけい龍華寺に遊ば絶景松島橋を取取取す

いへともり寺に其寺の早霜送方あああよつて他御に御言か

すなをけ後の行脚凡春のため夏に十二景をうつす

富士養嶽

三徳長洲

田子古風

清見旧園

津津釣船

清水晴嵐

中村里秋原稿用紙

樂子返照

久能晚鐘

村松落戸

大部花籠

南六晩色

東海月夜

左の題も探して遊ぶその巻頭にあたりて

あかこころ飛か富士に踏席し

素琴子の涼風あああをわすれて遊ぶ事+別界の王如しけしは

いりそきり事あり又奥津に飯る

る別

かたむらの油師へ出るや袷たたたり

老師の一封島田よりあああの奥島おおおくに

尚く三月尽より初五章感吟いいい計一夜結別別別ああああゆ

龍華寺

五原のあかこ

新化寺

あかこ

老師一封
島田より

旅用念道

行中

たあに承外三月尽又おもしろく愚詠何れ無三か

寸陰をあらは

暇の袖引とめよけと、きす

錦提て先を取るや真筆

卯夏あま

史量齋

野中中坊

け既路の為別は五月末つあたと定めけるをいたつくす
けりて漸進園念道二境にありぬさ小よ夏のあひも三十

千五ノ何
七ノ何

日録りすは去たりに着門送りすとして暇の空とろす
りた了念七おもふさま日ちりぬ

漸くといひくの山鉾や杖をけふ

為別(きつとこころナレ)

あしをしけ清見か園の人くに頭陀の内あやしめら下
二才三の器字より花の橋はいかに杯向うしとつあつ例
に蓮門は青園を月としきりにおの附句とるも甚陽甚時と
いへる柳あうて古翁のふすやよす足師の十七の條に
いへる迄のころをむかへ外に侍授有るを我しらす
句勅進帳を破ふしと石才の底をはたく園の人くも

川	影	長	と	カ	影	其	お	く	れ
流	之	廊	や	防	美	布	と	片	に
上	清	下	紅	立	の	の	と	園	心
野	水	器	の	の	花	足	夏	に	解
の	に	行	に	く	中	を	纏	草	へ
花	あ	月	く	さ	山	を	を	纏	鹿
の	く	の	さ	は	路	を	北	を	の
雲	は	奥	日	目	の	あ	あ	尾	の
つ	五	あ	月	鼻	の	く	え	表	踏
さ	五	ま	鼻	出	拍	え	す	分	分
	百	ま	出	け	子	す	け	け	け
	百	ま	け	の	を	け	け	の	の
	百	ま	拍	拍	を	の	の	日	送
	百	ま	け	拍	を	拍	拍	焼	り
	百	ま	け	拍	を	拍	拍	は	は
	百	ま	け	拍	を	拍	拍	并	な
	百	ま	け	拍	を	拍	拍	度	く
	百	ま	け	拍	を	拍	拍	に	し
	百	ま	け	拍	を	拍	拍	し	

中村里秋原稿用紙

才	下	霜	有	青	休	日	津
布	紐	し	明	の	ふ	や	草
の	と	り	の	市	く	九	上
智	髻	和	光	に	ぬ	ワ	野
恵	と	を	の	青	母	の	の
を	ま	置	白	録	の	け	花
あ	り	け	録	巻	の	ふ	の
る	と	け	巻	の	の	と	雲
子	後	け	の	の	飲	鐘	つ
高	家	け	寒	飲	正	国	さ
山	結	け	橋	正	い		
暖	ひ						
山							
茶							
解							
遊							
瓜							
卷							
柳							
一							
筭							
五							
明							
左							
幕							
草							
下							
露							
雨							

由井の一篇

嘉吟

とくに送りにくくさはの茶衣のしほらくの衣跡をおし
 あまにありつるし人有申井の一滴子ありさほおまつに
 越す道すも予か帰路をまゝ且女ほとりの遊りも水
 たるをほいなあつて念中者女の銚別を
 藻や岸をほたつて又とこへ
 旅の油師に巻の風
 吾中
 白布五調雪支の三子なをあくの中にも雪支外さまの事
 あつて富士川の道近き又油を分つ
 嘉吟
 誤
 宇明のぬし予か魚津の旅館を訪れ日は雪の休遊に朝

中村里秋原稿用紙

源

探して無下に風興をもちせし
 ぬけおほき亭に望をと
 リて
 夢をさすし
 立付の富士風
 明小ば再會をちまりて
 銚別
 一夜酒や十日紅の名も有そ
 宇明
 為別
 一夜酒や別水の味は十夜はた夜
 け星は名にあふ白酒をつくる所有小はあし申拾ぬ
 原山宿

(あまのきりこころ)

なほ訪ふに湯治のよしを尋するに父かやめやあたと
りけやすま

立つ居つ涼しや鴨の亭主振

神奈川

白牛良医の閑亭に入ればほとり旅方をわすり

百草の香をさすしたる景は

挨拶

覗のゆていきゆはつめし草の庵

白牛

東武 曉花楼

百余りの旅り羨なく更鏡使の橋に登てつくく雲水の

神奈川
白牛(区)

曉花楼
更鏡

中村里秋原稿用紙

身の行とをありと包小はをこの宿家には純子着る者の
夜を寝はくわめこの閑亭には青羅のうちに高臥し
涼し村月を詠むにわしめをみ師徒のおよほす所な
り、頃しも希平の武具に風入るとと徒者の立すわくに
その家くの葉たるとし。わかれ句袋のほこりをふりふ

夜着の癖に寝て来て頭陀の土用干

雪中庵主の駿河もとりを

しばらく我が曉草楼に

と、とる

水無月の島士やはなしはまた幕

更鏡

高野の山に下りて... 東武 曉花楼の神奈川の... 徒(徒)の... 徒者の立すわくに... 徒者の立すわくに... 徒者の立すわくに...

隈(隈)

?

雪を出て又白粥に暮かな	星 <small>星</small> 果は消けり汝千浮	己身を草にもしこや稚子の声	白鳥や雪水より生小いて	釣鏡に入ると見せて鳥が	いろくの花を釣出す柳か子	伊勢もの、味をやりこや年男	大井川しつめて落し橋かな	草もあき大井何原に鳴雲雀
出	果	己	白	釣	柳	伊	大	草
風	寸	吏	梅	素	表	宗	素	芭
草	長	鏡	人	水	浪	瑞	堂	蕉

春の部

中村里秋原稿用紙

草鞋より心や解る夏柳	夕涼み室に柱を遊ひけり	杖外もけふや忘れた葉に友涼	日黒みは松 <small>松</small> に勝けり夕涼み
草	夕	杖	日
野	暮	可	女
道	下	文	吏
			抗

草の春いよく也星のつはり	温繁や流は同じかうし	蘇の花君をやうの量か	金屏の唐崎鏡く門の松	遊ふ氣に遊翹あくと	鈍子浦にて	花の雲ちりや八千の船子	夕景や梅の白むと通ひ	旧会にもし又いながら	葉物のかさしと
台	達	巴	富	春		帰	松	恒	吏
車	李	水	夕	木		耕	隣	束	道

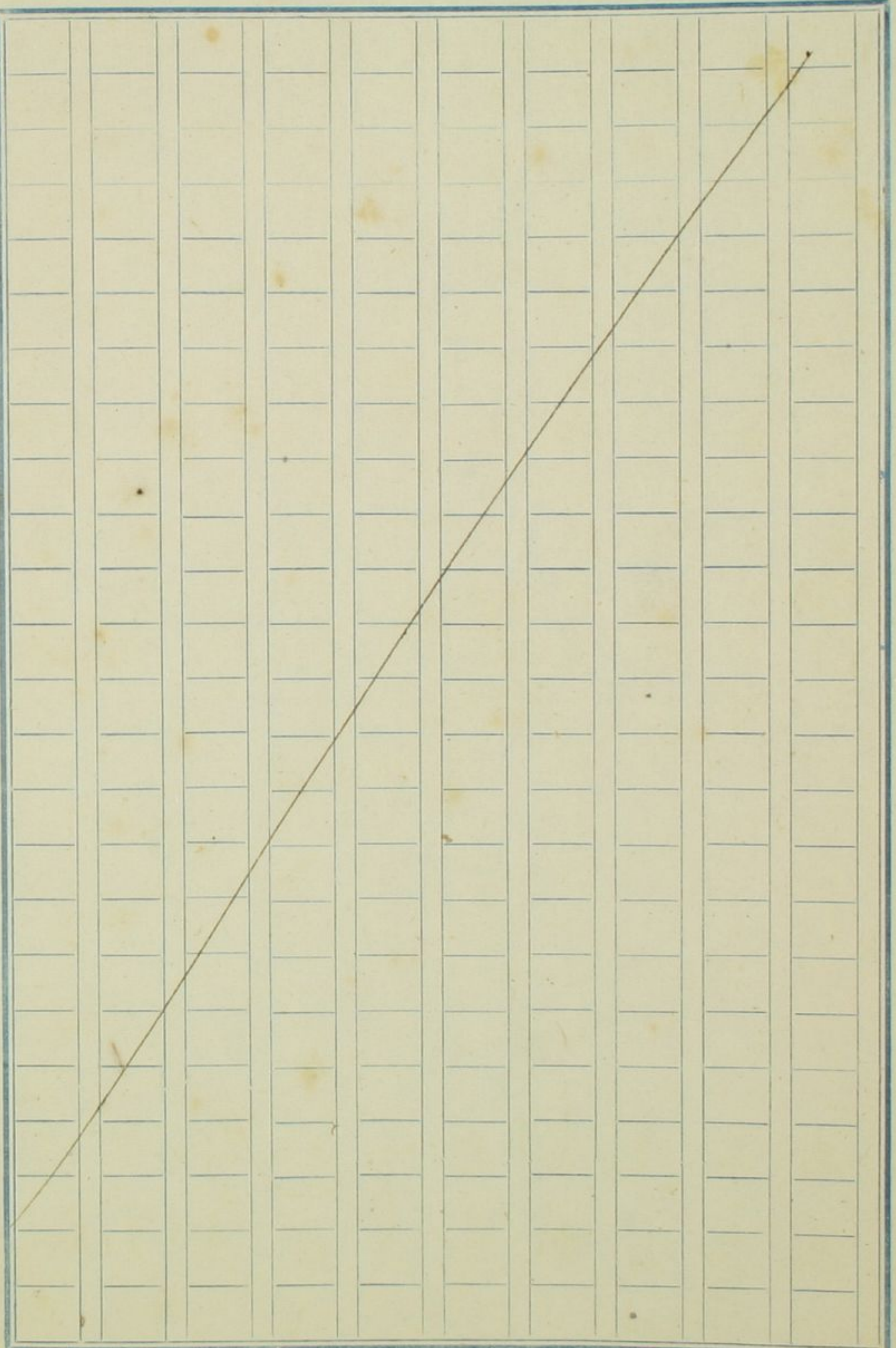
中村里秋原稿用紙

山崎や水の旅行真のあ	眺を明けくたの梅か	梅も梅もつあや花の春	うらむけた咲てあふな	幾もりと留る鳥あさ	高や山路の笛の扇こ	春よ小こほつりし	雛子やまつけいせいの	梅は今のほわとさし	鳥さしの梅あやした
吏	杉	春	己	人	春	秀	山	秋	里
門	鳥	陳	午	春	水	地	際	巴	席

ハケテカ
ハケテカ
ハケテカ

草餅や蝶以五二托ふ時	片りて行きや蝶の蟲より	春へ継ぐ伽羅やはつ言の郭公	踏ふと橋有りたり花のあはく	築山の世の好むかこすやれ引	蒲菫着て森の中眺の是一つ	明けか、小鏡と橋と眺かふ	山崎や草の中の小けや釣瓶	障不して寺行や寺のか、り人	汐干お右や心のちりの絵所
可水	暮夕	暮葉	次席	平会	吏玉	富水	吏右	吏象	吏六

中村里秋原稿用紙



花の日の曇たうそや朧月
 一二足鳴は蛙も哀小なり
 梅咲と園さへ春のあうりけり
 夕草や麦の青葉を散り換
 い左つくす待りて 紀の若山よ
 と、まじりて同行夢を待たか
 病の書附侍りぬ
 芦田鶴の角組遊さすけり引
 春のけりや夫の末りの物葉は
 長閑なる日のしたる辰やいと換
 鳥の紅粉や白粉やんめの花

鳥田

曇 秋
 巳 4
 半 醉
 斑 鷲
 葉 五
 川 島
 免 流

中村里秋原稿用紙

玄関にその申待やんめの花
 隣方の雙を配や郭公
 露波に押立了橋や撞木杖
 身帯に風を入こや花同き
 招小木に雲紅つけはや雛遊む
 糸遊ふに引れて弱け柳あふ
 乙すすしそ花のあたると桂引
 鳥城に中は空に遊びて改干引
 うた、森の響の中より雲の影引

其 牛
 白 仙
 暮 七
 菊 巴
 其 桂
 九 丈
 菊 午
 李 冠
 河 鳥

白	いはしめ	赤	つ	卯	め	と	柳	の	花
波	を	追	ひ	波	を	追	は	す	け
蜻	く	や	い	く	う	飛	ん	て	し
海	棠	や	胡	蝶	の	夢	の	幸	結
極	葉	は	こ	う	に	花	の	彼	岸
若	草	や	蹴	は	詠	の	り	や	ま
藪	入	や	寺	の	一	小	風	只	麦
永	き	り	や	く	と	柳	に	よ	く
永	き	り	や	く	と	柳	に	よ	く
苗	代	や	け	お	は	鳥	を	隠	す

中村里秋原稿用紙

鳥	息	や	往	来	又	お	ろ	う	山
梅	の	前	に	一	書	味	や	春	の
七	草	や	詠	る	に	願	了	一	長
後	棚	や	詩	歌	に	あり	お	夜	の
人	の	前	に	一	書	味	や	春	の
卯	午	や	心	の	約	と	は	な	し
廿	律	家	と	雛	の	都	中	ま	の

鉄	五	葛	葉	花	後	柳	暖	瓜	右
紫	明	栗	外	汐	羅	=	山	養	葉

蚊やう木に荒けり伽羅の瓜はつれ

雨けまら骨のまゝあう郭公

高飛びに柳之せたる蒼かふ

質根流

燒草や萩の中の花あふす

詠人のしるこ通る柳入の居士

拾ひの風のためやほたる羽

七月雨の足下飛ひく青月哉

旅のあそびを鴨の夕也かふ

五月雨のさうさう五月雨哉

女
史流

白
牛

杉
会

調
柳

素
俊

左
殿

右
殿

一
志

石
叟

早乙女や月の白毎に笠の親

透通の氷室とさ中心た

五月雨やさうかの夢切跡をさへ

空柱の表家を隈や土用干

陽春のうづりく雲の峯

若外にたはむや虎かきか右雨

あつ雲の下は雨降日柱のふ

山次の本葉集へて管のふ

げふし奪之あ朱や花松板

秋葉の夕は東しよし若楓

釣
使

里
柳橋

五
調

百
奈

雪
言

雪
支

鯉
遊

晴
山

瓜
養

中村里秋原稿用紙

高士し雲の帯仕をヤニろとみく

解之行影や情水に雪の下

香は色に晴けり夕方の暮薄葉44

綿ゆきやとろ、にみはるすきし15計

麻州中畧を一荷せむわて果す

鍾別

雙木立は厚かこけまの日のくらく

洗艸涼しや風の小いとく

川の隈の音や寝るのあへに鳥

尾よりくしけりて娘の夏の月

芳

九

大

法

巴

雨

孤

河

李

午

丈

耳

如

衣

亮

帆

鳥

冠

亮

形

夕顔の葉待てや蟾蜍

青委ゆ外にしらるゝ花の敷

秋之部

長月未出所を通了

いつしかに稲を干瀬や大井川

待青や立つくしたる暮の松

名月や宇治はちろほろ源氏雲

行秋よ糸拾ふて野馬車

葺のあぢ水ぬ其日くかな

淋しさけ家て用了碁引

上総

桃

心

其

乙

柳

里

巴

理

然

嶺

祇

角

由

居

紅

静

然

中村里秋原稿用紙

瓢ひ、吐こや垣に駒か嶽
宜 来

月今宵入や竜田の川にしき
松 全

朝霧や掃音まては包のね
左 水

菊月やまた結いきくに足あたらふ
山 蝶

名月や竜追しもきりふけい
里 席

都には和うし笠屋の今秋の秋
末 会

白露や己が音し草の上
可 水

旅人をいくろ休めてさる柳
春 所

七夕や月鏡の磨初
以 席

中村里秋原稿用紙

いもの登河

草とりのまきあや葉蓬に似て

一雨露を染みすうたか秋露を玉と

あさあくとあさあかととむ秋と

降しあやんより七か一あやの御鉄

足弟といとみだわあの一軍書札母の年

見七七なつあきぬあき又若しく月の

夕べ上階の手をよほ侍あかへにかくに

風流しりと盛祇の思いを侍侍り

子もひとつ持けり草のころひ合
班 話

門は杉音めは紅葉の秋酒
五 調

秋風日夏のうすの葉か
百 奈

山雀のはやさや病の胡桃より
雪 六

鳴子 引人に 馴こや 里あす	去月や 蹄の 名 のそよ くほと	花鳥は 昼の こ 物 おし の 声	葉打の 拍子と 交 まぬ たが	道す せ は の 花	稲妻や 鳩と 時を 立か ほり	山里は ささ ま 杉に 天の 川	葉は かり の う を 花 と や 鶏 頭 花	栞 枝 の 外 の 鳥 と み や	社風 や 是 吹 落 了 水 の 音
東 所	去 仙	壽 軒	孤 帆	百 鳥	鈴 葉	五 明	夜 罷	柳 二	左 簾

明か い る 夜 や 一 し き り 麻 の 声	木つ き や 里 の ま め た に 構 交 り	さし て 行 う へ に は 散 や 紅 葉 白 傘	草の 戸は 稀 ぬ 馳 走 に 紅 葉 外	秋風 や 紅葉 の 橋 の わた り 初	色鳥 や 微 か く 構 梅 の 風 の いと	は せ と 葉 に 聞 か へ て 市 の 傘 の 音	雪 牛 鹿 の 重 担 に	所 く る 風 信 さ へ 替 り 踊 か な	七夕 や 川 を 際 こ 二 世 帯
琴 雨	茶 斛	花 汐	葉 外	葛 栗	瓜 養	暖 山		鯉 遊	雪 杖

仕 ゆ け 機 織 く ぬ 夜 と あ る 十 夜 分	入 相 を 深 に 伺 や 落 葉 寺	鳥 か ら 暮 て 鞍 馬 の 時 雨 か な	研 立 の 鏡 に 顔 の 寒 か な	山 風 や 松 杉 を は な み 雪 つ ぶ て	お と ろ か を ぬ 往 来 や 冬 の 大 井 川	馬 土 は し ら し 時 雨 の 大 井 川	冬 之 部	宵 月 の 鎌 さ へ 入 す 虫 の 声	魂 棚 や 言 詠 と あ る 月 の 浅
水 音	風 葉	素 丸	竹 阿	馬 芝	地 隣	芭 蕉		蟻 考	千 金

是 川 は な を 哀 あ る 秋 の 水	魂 魂 は ま に め け た る 累 山 子 哉	霧 立 や 白 く 染 た る 山 と あ る	馬 の 鼻 や 鼻 蓋 と 錦 の つ 小 糸	船 州 の 腰 に 延 さ て 入 り か ふ	風 鈴 の 風 は 休 み と あ る ほ か れ	瓢 箆 の 盗 人 と 帰 る 月 と あ る	名 月 や 早 稲 の 茎 の 数 け け め	瓢 箆 の な ら と 冬 瓜 の 哀 あ る	行 秋 や 隣 に 家 は あ る な ら ず
百 川	鳥 牛	鬼 流	葛 七	菊 巴	其 桂	葛 牛	九 丈	大 耳	電 朝

中村里秋原稿用紙

時雨

入^レ北の、形にしたかか子海風外
柯涼

雲ふ^レ北^レ舟は^レ雲の帯巻
左水

風と^レ之^レ水は^レく^レ / 雲^レも^レす
升巴

梅^レの^レけ^レ月^レも^レ梅^レの^レ街^レかな
夢葉

一^レ二^レ羽^レと^レ聞^レへ^レ / 淋^レし^レむ^レ牛^レ鳥
百鳥

埋^レ丈^レや^レ火^レ着^レに^レ用^レく^レ夜^レ半^レの花
五調

氷^レつ^レく^レ夜^レや^レ明^レの^レ行^レめ^レく^レめ^レ鳥
百朵

麦^レ蒔^レや^レ干^レ鰯^レ手^レ付^レふ^レむ^レ鳥
雪六

雪^レ一^レ羽^レは^レ舟^レへ^レ飛^レふ^レや^レ足^レの^レ踏^レ鳥
雪更

雪^レ取^レの^レ角^レ力^レは^レ風^レに^レと^レま^レり
鯉遊

中村里秋原稿用紙

花^レを^レて^レ風^レの^レ障^レり^レや^レ時^レ雨^レに^レも
夢雨

川^レ浪^レに^レし^レか^レら^レみ^レか^レけ^レて^レ氷^レか^レな
茶解

入^レ相^レに^レく^レく^レ北^レの^レな^レき^レ小^レ春^レか^レな
左簾

ま^レき^レ小^レけ^レり^レ雪^レこ^レろ^レは^レし^レの^レ瓜^レは^レつ^レ小
瓜養

親^レと^レ子^レの^レ中^レも^レあ^レつ^レま^レし^レ丸^レ頭^レ巾
曙山

哀^レ知^レし^レ秋^レ之^レぬ^レ月^レを^レ網^レ代^レ守
柳二

風^レや^レ未^レに^レ成^レた^レ了^レ木^レ芽^レ漬
藤羅

青^レ空^レを^レ持^レぬ^レこ^レも^レな^レし^レ小^レ六^レ月
五明

掃^レ除^レす^レ跡^レを^レ追^レは^レて^レ落^レ口^レ敷
花沙

半^レ思^レを^レう^レち^レ込^レ市^レの^レ時^レ雨^レ外
葛栗

娘の下のし
屋山子?

足とカ

夜もすから	聞や	衛の	磯ま	くら	素	外						
娘が	手の	旅	まで	届く	頭	巾	引					
鰻	汁	や	け	世	の	月	を	久	く	思	ん	
肌	ハ	や	猫	も	出	て	来	る	釜	の	下	
用	の	底	敲	け	り	森	の	お	く			
鉄	叩	刺	ら	て	浮	世	に	半	こ	ろ	も	
華	生	に	手	紙	さ	し	け	り	冬	籠		
神	も	留	守	に	足	を	頼	む	や	毒	の	花
冬	の	日	や	中	つ	も	山	の	旅	模	様	
あ	ら	雲	の	跡	に	は	く	小	こ	夕	時	雨

中村里秋原稿用紙

0

豆腐	も	も	庵	下	た	、	ぬ	寒	さ	か	な	秋	子
ね	む	ら	は	や	我	も	会	式	の	花	の	陰	
炭	賣	は	酒	に	あ	た	り	て	蕭	途	外		
水	に	も	の	書	て	遊	ぶ	や	鴛	の	中		
あ	た	、	ま	じ	加	減	も	丸	し	玉	子	酒	
印	像	の	手	を	組	か	へ	て	火	桶	が	在	
菊	を	け	ふ	葉	に	葉	か	へ	て	初	竹	雨	
埋	火	や	け	い	せ	い	二	人	更	て	行		
役	と	め	に	春	待	月	の	離	か	子			

碎世

夢太妹

稲波

二人カキ

夜極に鳥賊のすみ吐く曇外

平倉

波吹おこす月の春凡

電中

雛衣の都うつし七車集にて

史子

茶鐘一ツか目を廻すらん

富水

桑庭をしほす暖扉の水洩魚

史六

はしめつ蜂の時雨して行

史六

旅はたゝ哀のちなる袖日記

史象

龍眼肉も摘息したり

史象

東堂の多主も道のにおこたうア

史象

人目も草も風も冬の中

史象

蛙鳴背丹のおほつ加なき

浦つたひして雅反測時

なす茶店子硯を存すすに

えよ汐風雲を動して

また盃の興をえふる

物の具にいつかのまゝなる花化粧ひ

耐得も古い社家の菓子盒

茶山衣子日ははつ／＼の藪袂襖

甜さしの笛のひそしくそ

くらくらの四十へまたくゑのくすくす

そ中も着伏の揚衣ちりり

温泉又舞のふくさほひけは初昔

生生果す時てつゝ鳥

井篋も寺子の欠ひおとろか

柱めくしと磨一枚

水 太 柳 六 末 文 松 秋 氣

中村里秋原稿用紙

地邊の酒の行衛は川善清

夜をぬぬ顔の夜遠星も

布帆の栗にふるふの髪たぐぬい

簾簾朶を積水て鳥の細道

身の秋もまた音前非時のあつりく

思ひ盡しと聲に降雨

燈飾の碓井を下りて軽井沢

十便しゆく音高衣老にけしな

法会又目鼻か音付音夜しすこに

毘蘭して舟は出行

藤 柳 太 末 水 六 松 文

深川や夏とよけ木と花の雲
八色山吹の海苔の端

秋中

名三石田秀氏作の
昭和十年一月
多岐

中村里秋原稿用紙

此書法月俊郎氏のものを借りて写す（昭和四年六月廿五日）
法月氏には左の識法あり

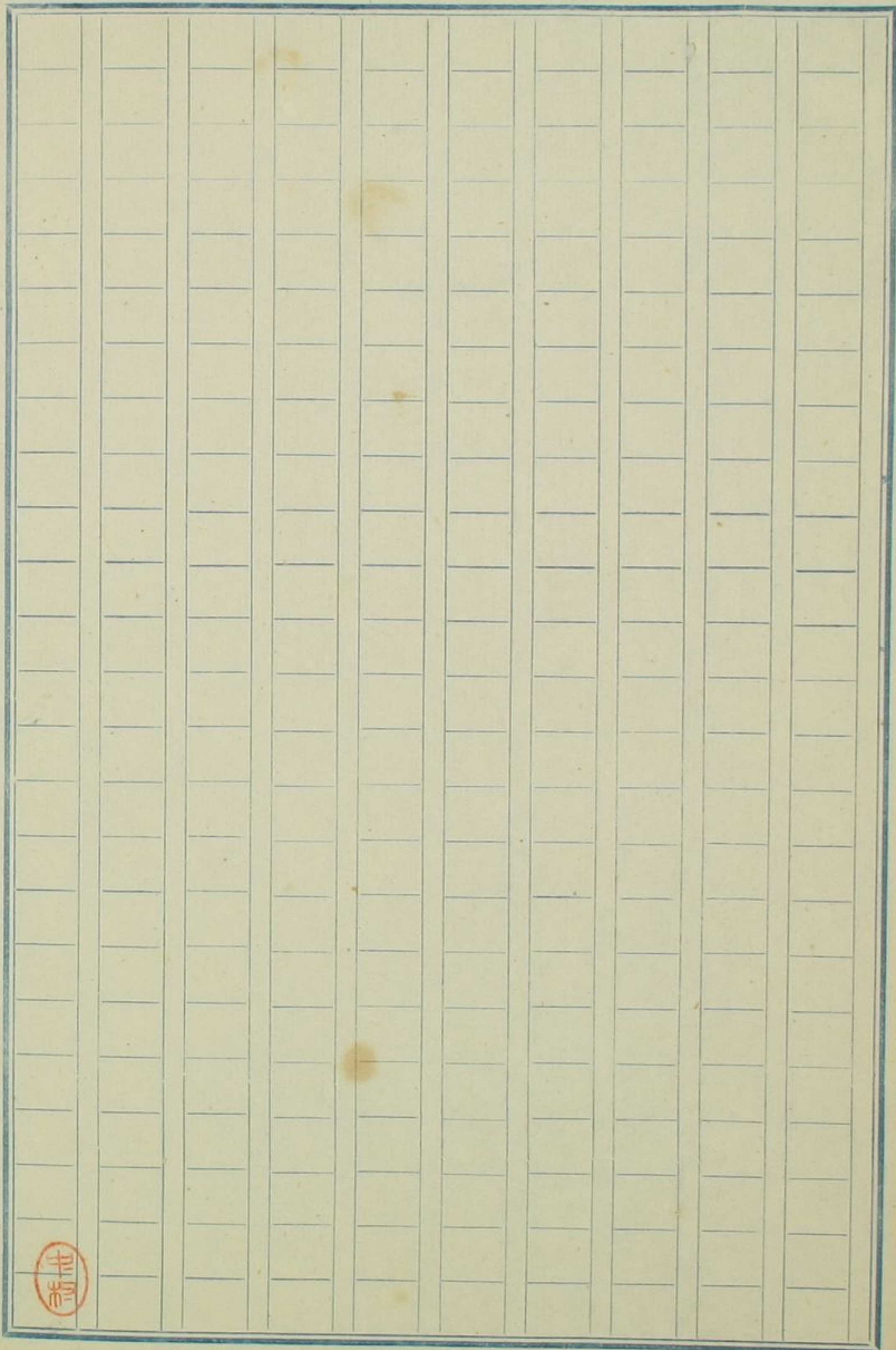
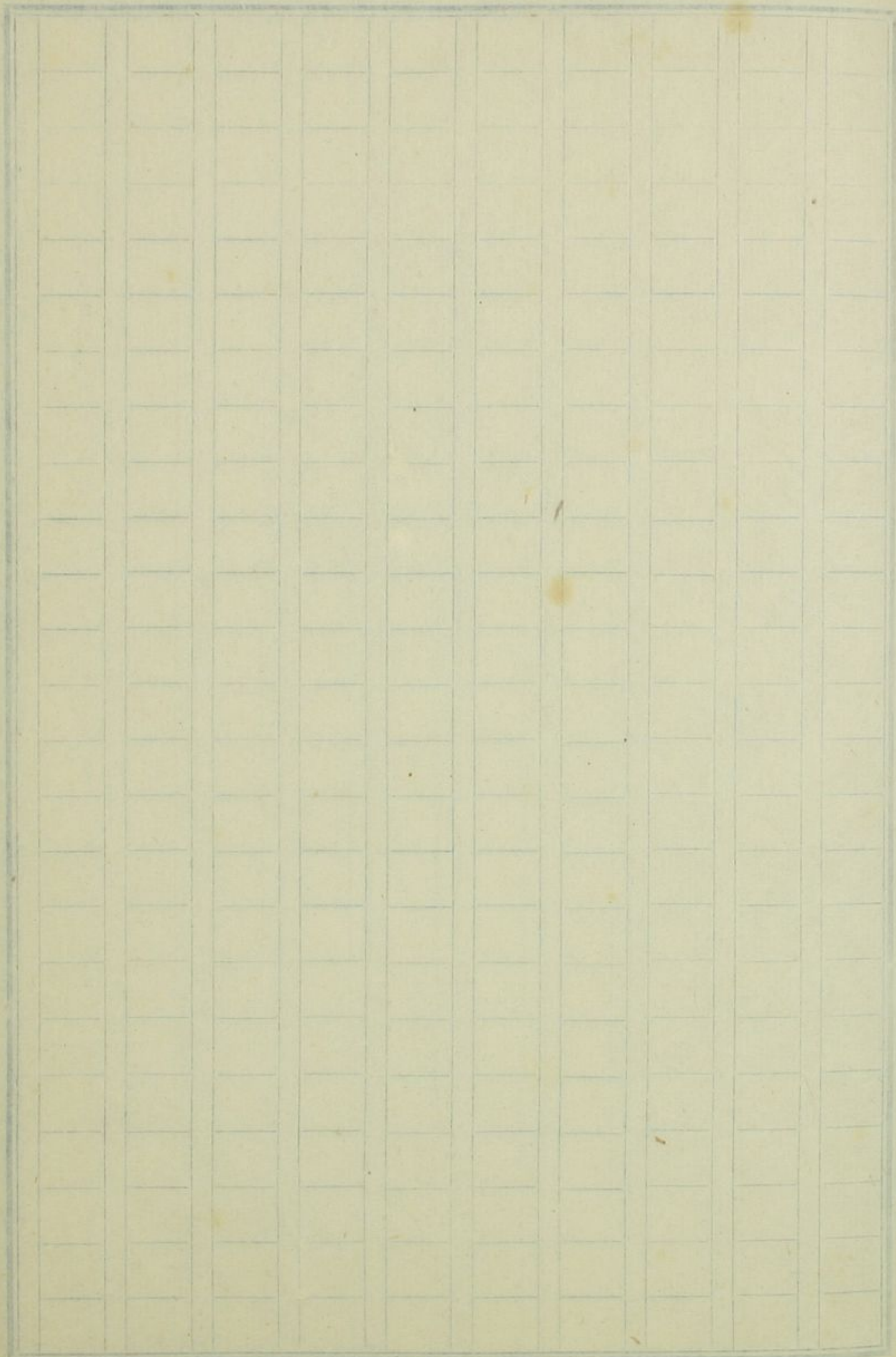
駿州真津中宿手塚家の所蔵本を田中秀夫氏の
厚意にて借覽することを得て写す

昭和二年十月廿八日

此書の上梓は疑ひあり所あるか吾牛庵例にて
も今は知らざるもの如し

寛政三十四年
の書目録に
載る

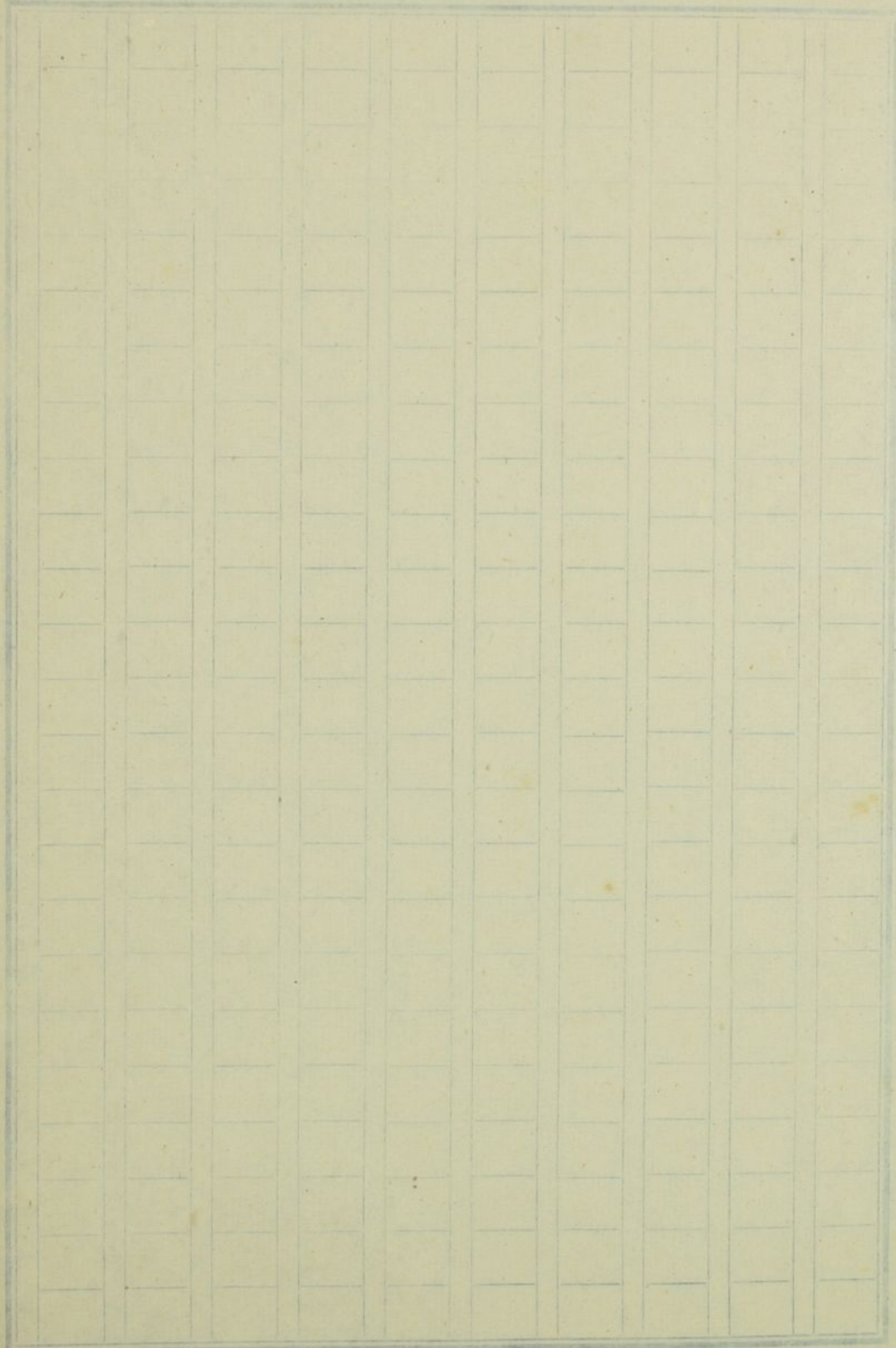
年代は宝暦の初年なるべし
吾牛柳屋を記す所に
代表は東武の蓮門の月し
らとしいあき
きを今日はこ



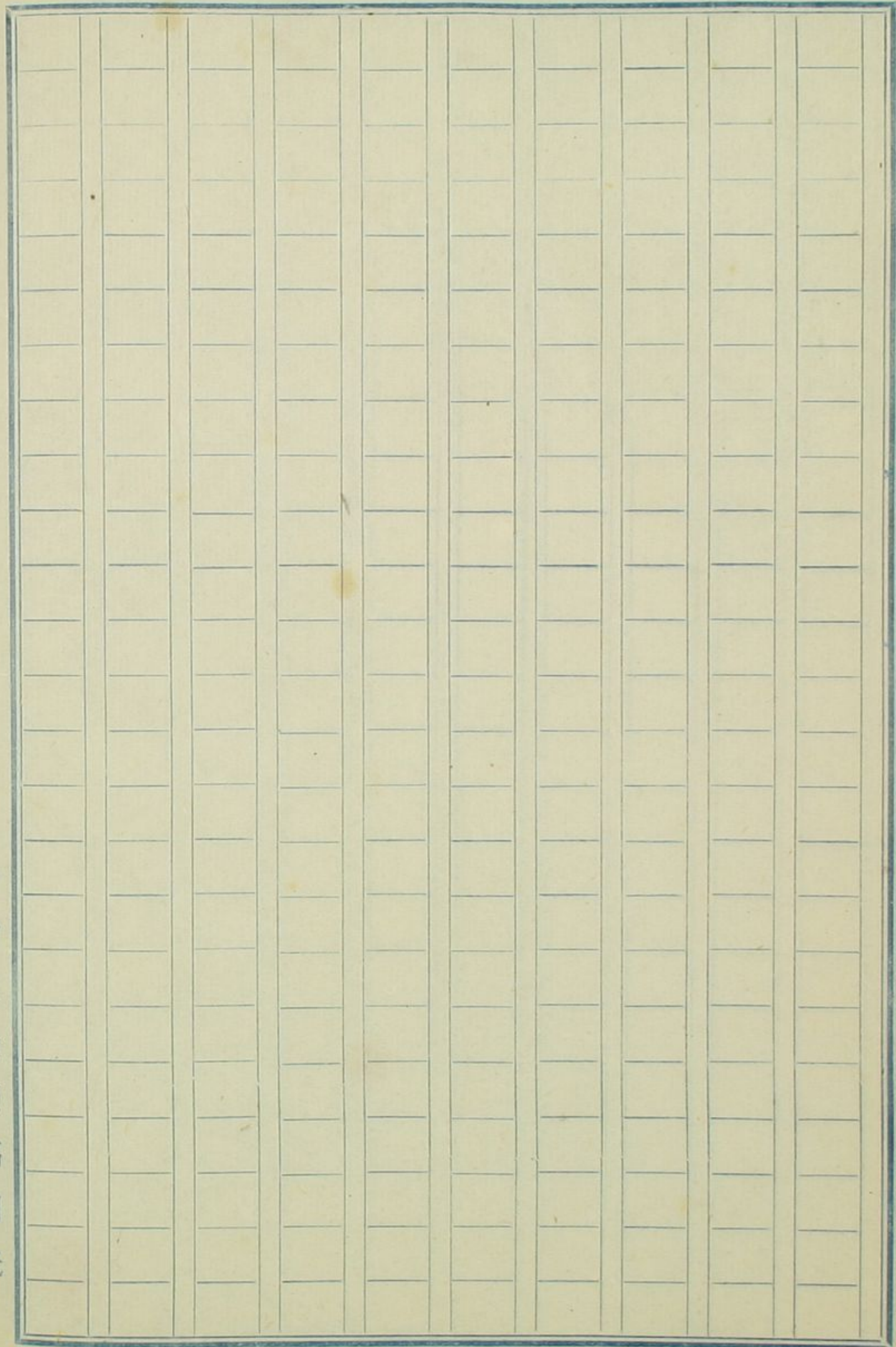
中村里秋原稿用紙

中村里秋原稿用紙





中村里秋原稿用紙



中村里秋原稿用紙

